

キリスト教思の新しい展開 ——自然・環境・経済・聖書（4）——

<講義の概要・目的>

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新たな展開の可能性について議論を行いたい。扱われる問題圏は、自然・環境・経済・聖書で構成されるものである。取り上げられる問題は、自然神学、聖書学から日本キリスト教思想までキリスト教学の全般に及ぶが、2015年度後期は、自然神学の歴史的展開を辿り、社会科学への拡張を具体的に論じる。こうした連関から、現代の科学技術の諸問題にも言及する。

<講義のスケジュール>

1. オリエンテーション、導入	10/6
2. 自然神学とは何か	10/13
3. 自然神学とキリスト教思想(弁証と論争)の形成	10/20
4. 自然神学と自然学・自然科学	10/27
5. 自然神学の古典的な諸問題	11/10
6. 自然神学の拡張と聖書	11/17
7. 聖書の社会教説	<u>11/27</u>
8. 聖書の経済・環境思想	12/1
9. 聖書の政治思想	12/8
10. 自然神学から社会科学へ	12/22
11. キリスト教思想と科学技術	1/5
12. キリスト教思想と生命	1/12
13. キリスト教思想と脳科学	1/19
14. フィードバック	

<成績評価> レポートによる。(講義内容の理解と、それとの関連における問題の展開を問う。) レポート内容についての相談は、個別的に行う。

<受講の注意事項>

- ・教科書は使用しない。講義では、毎回、詳細なプリントを配付する。
- ・受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。
- ・受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（金3・4）を利用するか、メー

ル（授業にて、指示）で行うこと。

<導入> 自然神学を問うために

0. キリスト教研究＝キリスト教学という学問研究
歴史的な生きた宗教としてのキリスト教という問題

(1) 「キリスト教と文化」という問い

1. キリスト教の多様性
2. 歴史的な多様性

水垣渉「「キリスト教とは何か」の問いをめぐって」(『日本の神学』49、2010年、7-31頁)。

「キリスト教の多様性からその全体性へ——キリスト教学序説のためのノート」

(『基督教学研究』33、2013年、1-22頁)。

「聖書の伝統としてのキリスト教——「キリスト教とは何か」の問いをめぐって」

(『日本の神学』54、2015年、9-22頁)

3. 類型論：H・R・ニーバー

- ・「キリスト教と文化」の関係についての類型論（ヘルムート・R・ニーバー）

キリスト教と世俗文化との関係性をめぐっては、これまで多くの議論がなされてきたが、ニーバーの類型論はその古典的な研究といえる。

断絶・対立（テルトゥリアヌス、トルストイ）

／中間（差異を前提とした関係付け）

階層性：スコラ的文化総合

緊張：ルター

回心・変革：ヨハネ、ニーバー自身）

／連続性（自由主義神学）

東方敬信『H・リチャード・ニーバーの神学』日本基督教団出版局。

キリスト教思想史・キリスト教史、組織神学、キリスト教倫理

- ・スコラ的な文化総合

階層的秩序：自然と超自然の区別と調和 → キリスト教世界に構造的安定性をもたらす。

存在の大いなる連鎖（神から物まで）

cf. 近代以降、近代から現代へ

儀礼による秩序の維持（池上俊一『儀礼と象徴の中世』岩波書店）

- ・スコラ学（13世紀）、パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』ちくま学芸文庫。

哲学（ギリシャ哲学）と神学：単純に区別できる関係ではない。相互連関・相互影響。

- ・アリストテレス（イスラーム経由）主義とアウグスティヌス主義

- ・ドミニコ会とフランシスコ会

↓

緊張関係

人間の魂・世界は永遠か？

神の知としての神学、「聖なる教」（sacra doctrina、トマス）

聖なる教に属する神学と哲学の一部門としてのあの神学との区別

自然神学と啓示神学、啓示神学と聖書



神学の概念史における中世

- ・「単に対象構成のラチオのみならず対象内容をも峻別するようになるが、トマスの「聖なる教」は、いわゆる「自然神学」に対立する意味での「啓示神学」よりも内容の範囲が広くて、いわゆる自然神学の取り扱う内容をも包含している。」（山田晶責任編集『トマス・アキナス』中央公論社、84-85頁）

「自然の光のもとに知られうるもの」は、「啓示の光において知られうるもの」と部分的に重なる。同一の知識が、受け手の知性の段階に応じて、二つの仕方
で知られる。



存在と認識の階層構造

4. 理論的分析：意味論

- ・芦名定道「原子力とキリスト教思想——矢内原とティリッヒ」（キリスト教文化学会）
「次に、ティリッヒの科学技術論を参照することによって、これまでの議論から得られた二つの論点、つまり科学技術の批判的監視と文明的視点とについて考察を進めることにしたいと思います。ここで参照されるティリッヒの科学技術論とは、彼が科学技術について直接に論究した文献ではなく、1920年代後半にプロテスタンティズム論として提出された議論を科学技術論として解釈したものです。⁽⁵⁾ 注目したいのは、プロテスタント原理を構成する四つの契機の弁証法的連関です。

ティリッヒは、19世紀の自由主義神学と20世紀の弁証法神学の双方にまたがる、いわば両者が交差する場に位置するキリスト教思想家として有名ですが、前者のキーワードである形成（*Gestaltung*）と後者のキーワードである批判（*Kritik*）とを統合するものとしてプロテスタント原理を捉えようとしています。19世紀の自由主義神学は、基本的に市民社会の「形成」というモチーフに連なっています。それはキリスト教が近代の理想社会の形成にどのようにコミットするのか、という問題意識であり、栗林先生のお話の中にあった科学に対する信頼とか、科学に対する信仰にもリンクすると言えるでしょう。それに対して、20世紀のバルトラによって始められる弁証法神学は、神の側からの人間に対する「批判」、つまり神の裁きのもとにおける人間の危機というモチーフに特徴があるわけですが、ティリッヒにおいて、この形成と批判の両方は相互に結びつけられることになります。したがってティリッヒは、半分は自由主義神学者で、半分は弁証法神学者というポジションに位置づけることができます。

この「形成と批判」とは別に設定されたもう一つの軸が「自律と神律」です。これは、ややおおざっぱではありますが、近代の宗教思想の中心問題の一つである「文化と宗教」の関係と理解することができるでしょう。ただし、宗教は文化とは異質でしばしば文化と対立するものであると同時に、文化の根底にあってそれを基礎づけるという側面も有しているということを表すために、ここでは、合理性である自律的文化に対する「超合理」と表現することにします。これはティリッヒの言う「神律」にも合致したものです。

やや抽象的な議論になりますが、以上のように、「合理と超合理」と「批判と形成」の

二つの軸によってプロテスタント原理は構造化され、ここから次の四つの契機が提示されることとなります。すなわち、合理的批判、合理的形成、超合理的批判、超合理的形成です。この四つの契機によって、キリスト教思想と科学技術との関係を描いて見ようというのが、わたくしのこれから話の要点となります。

まず合理的批判ですが、これについては、歪曲としてのイデオロギーに対する批判、たとえばマルクス主義による資本主義批判が実例として挙げられます。現実を歪曲化して覆い隠すようなイデオロギーの作用を、社会科学の力によって批判的に解体して解明する、これが合理的批判であって、わたくしの話の最初に述べたような、1950年代の原発の導入が一体どういう経緯だったのかを明らかにすることも、歪曲としてのイデオロギーに対する批判の一環にほかなりません。合理的批判は、現代の科学技術を論じる上で、きわめて重要な役割を果たすものと言えます。

このように、一定の合理的理論に基づいてなされる合理的批判の活動は、科学技術の現実を規定する歪曲に対処する上で重要なものでありますが、ではこの合理的批判を可能にしているものは何なのでしょう。リクールは、『イデオロギーとユートピア』（新曜社）という講義の中で、マルクス主義的なイデオロギー批判の基盤を掘りさげる作業を行っています。それによれば、現実を歪曲し批判されるべきイデオロギー自体が、その基層に自己同一性としてのイデオロギーをもっており、現実を歪曲するにせよ、それを批判するにせよ、それは、その歪曲や批判を遂行する自己同一性を有する存在者（個人あるいは共同体）を前提にしなければならないのです。先に合理的批判について、それが合理的理論に基づいてなされると述べましたが、この理論を構築する前提となるのが、自己同一性としてのイデオロギーとして問われているものなのです。この自己同一性としてのイデオロギーは、ティリッヒの用語で言えば、合理的形成に対応させることができるでしょう。すなわち、合理的形成は、合理的批判がなされる基盤・前提であり、やや正確さを欠く言い方になりますが、リクールがイデオロギー論で批判としてのイデオロギーの基層に見出した自己同一性としてのイデオロギーに関係づけてよいと思います。

しかしさらに、批判も形成も、合理性という水準に還元できないレベルに関わっています。すでに見たように、歪曲としてのイデオロギーに対する批判は現代の科学技術を論じる上で重要なものですが、それをさらに突き詰めて考えると、超合理的な批判の存在が見えてきます。実例として預言者的批判、つまり旧約聖書の預言者のことを考えてもらおうと分かりやすいかもしれません。旧約の預言者はいわば社会批判者でもあるからです。たとえば富によって裁判のあり方をゆがませてしまう裁判官の不正義に対する糾弾がイザヤ書（10章1-2節）の中に出てきます。

「災いだ、偽りの判決を下す者／労苦を負わせる宣告文を記す者は。

彼らは弱い者の訴えを退け／わたしの民の貧しい者から権利を奪い／やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」

これは、金持ちの利益のために判決をゆがめ、貧しい者に対して不当な判決を下す裁判官に対する批判ですが、時の政治権力の圧力のもとで偽りの判決を下す裁判官は、古代イスラエルだけでなく、現代の問題でもあるのです。イザヤの預言は、社会批判として確か

S. Ashina

に合理的批判というべき内容を含んでいますが、それは単なる合理的な分析とは違うそれを超越した源泉、つまり神の言葉からなされています。これは、超合理的な批判と呼ぶことができるでしょう。

合理的な自律的精神の営みに対して、その根拠（根底にして深淵）として機能するのが超合理性として位置づけられる契機なのです。これを意味論的に説明すれば、次のようになります。日々わたしたちが行う行為が有意味であると言われるとき、その有意味性は、諸行為が相互に繋がりが合って成立する意味連関の中にその行為が意味連関の要素として位置づけられることによって成り立ちます。これは有意味的であることを可能にする意味の形式性と言うべきものですが、この意味連関全体の意味はこの意味連関内部では構成できません（意味論のパラドクス）。この意味連関自体の根拠付けとして機能する意味根拠に相当するものが、ここで言う超合理性なのです。合理的批判がイデオロギー批判として社会的現実に向けられるとき、たとえそこに合理的な実現の見込みが存在しなくても、神から委託された誠実さの事柄として敢えて発せられるとき、それは合理的批判を支え続けるものとなります。旧約聖書の預言者の行った批判（預言者的批判）はその典型であり、日本のキリスト教思想史から例を挙げれば、内村鑑三の非戦論はそれに相応しいものと言えるかもしれません。

最後に超合理的形成について簡単に触れたいと思います。これは、ティリッヒの用語を用いれば、「恩恵の形態」(Gestalt der Gnade)と呼ばれるものであり、預言者的批判に先行しその前提となる形態的なものです。この超合理的な批判の基盤として位置づけられる超合理的な形成の実例としては、言葉に対する sacrament、あるいは預言者的精神の基盤にある祭司的神殿的宗教性を挙げることができます。

以上がプロセステント原理を構成する四つの契機の相互関係ですが、そのポイントは、四つの契機はそれぞればらばらに存在するのではなく、相互に関連づけられ、いわば弁証法的に統合されることによってはじめて、世俗的生と動的に結ばれた生きた宗教的生を成り立たせており、これによって宗教と文化のダイナミックな関連性が理解可能になるという点です。1920年代のティリッヒが構想した宗教社会主義は、まさにこうした弁証法的理論として提示されたのです。」

（2）宇宙論的宗教と別の可能性

5. 古代地中海世界とキリスト教

- ・ジャン・ボテロ『最古の宗教 古代メソポタミア』法政大学出版局、2001年。
- ・Barbette Stanley Spaeth (ed.), *The Cambridge Companion to Ancient Mediterranean Religions*, Cambridge University Press, 2013.

↓

宇宙論タイプの宗教：

神（々）の存在領域としての「天」「星界」

天と地の照応性 → 占星術

6. 創造論と悪論という共通基盤

古典的な自然神学：自然学（自然科学）とキリスト教神学

「自然学／形而上学」という枠組み

7. 東アジアの宗教文化的伝統において、古典的な自然神学はキリスト教思想にとって有効であり得るか。

8. 別の可能性

「家族／国家」という共同性あるいは儒教的伝統

・ Hans Küng / Julia Ching, *Christentum und Chinesische Religion*, Piper, 1988.

(ハンス・キュング、ジュリア・チン『中国宗教とキリスト教との対話』刀水書房、2005年)

9. 方法論：自然神学の基礎に遡り、そこから議論を再構築すること。

芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。

・ コミュニケーション合理性の探究としての自然神学

・ 自然神学の拡張という課題

↓

10. 現代の問題状況における検証

・ 芦名定道「脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方」(井上順考編『21世紀の宗教研究——脳科学・進化生物学と宗教学との接点』平凡社、2014年、161-202頁)。

「科学技術の神学にむけて——現代キリスト教思想の文脈より」(日本宗教学会『宗教研究』第87巻、377-2、2013年、31-53頁)。

「現代キリスト教思想における自然神学の意義」(京都哲学会『哲学研究』第596号、2013年、1-23頁)。

「脳神経科学からキリスト教思想へ」(京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第2号、2014年、1-14頁)。

・ ブログ「自然神学・環境・経済」(<http://logosoffice.blog90.fc2.com/>)